

企画テーマ

信仰の継承——刷新・試練・宣教

キリスト教信仰は 2000 年の歴史を経て、現代にまで継承されています。教会が拡大していく中で、安定した信仰の基盤が形成されていく一方、信仰や教会組織の形骸化もたびたび起こりました。信仰を刷新する運動は、キリスト教史の中で重要な役割を果たしてきましたが、その中でも後世に最も大きな影響を与えたものが 16 世紀ヨーロッパの宗教改革でした。



今回の展示では、宗教改革の遺産の一つであるルター訳聖書をご覧くださいと思います。信仰刷新の基盤となったのが聖書でした。

ルターが宗教改革を推し進めていた同じ時代の 1534 年、イグナティウス・デ・ロヨラは、カトリック刷新運動として、フランシスコ・ザビエルら 6 人の同志を集め、イエズス会を創立しました。そのザビエルは 1549 年、日本にやって来ます。ザビエルと彼に続く宣教師たちの働きによって、最盛期には日本人信徒は 40 万人に達したと言われています。しかし、江戸幕府はキリスト教を禁止し、厳しい弾圧によって改宗を迫りました。その際に用いられたのが踏み絵でした。今回の展示では、迫害期の象徴とも言える踏み絵の複製品を展示しています。



江戸幕府に続き、明治政府も禁制を続けましたが、欧米諸国の強い批判を受け、1873 年、キリシタン禁制の高札を撤去しました。それ以降、キリスト教への関心が高まり、関係の文書も多数出回るようになります。当時、もっともよく読まれたキリスト教の書物が、今回展示している『天道溯原』(1875 年) です。



幕末の禁教期、新島襄もまたこの本に触れて、キリスト教への関心を高めることになりました。1875 年、新島と共に同志社英学校を設立した山本覚馬の愛読書の一つも『天道溯原』でした。

